

一、去年極月四日大坂表御陣替の時、組頭の下知をもちかず先へ參候事。

一、鐵炮の者を連、打せ不申事。

一、引取候御鐵炮の者召連、次第能く引取不申事。

一、組の鐵炮頭以下先へ出候時、互に善惡の者様子可申上候事。

右の條々たとひ親類知音たりといふとも、ひいきへんばんなく有様にせんさくいたし、一人宛の手前々々の様子可申上候事。以上。

私曰。右五ヶ條の奥書、年號月日もなく古案の寫有之に付、其通に寫之。疑ふらくは、元和元年微妙公御書出を以て、寅の冬の戰功御尋の趣と見えたり。

一、大坂夏陣覺書七箇條

大坂二度目の御陣に、安房守武者を二段にして、其内より鐵炮のつは物三十挺、馬上三十人つは物をえり出し、かけまはる町ともにめしつれ、大坂勢かゝりきたり候はゞ、さきの鐵炮うたせ、二段めのものどもおめき叫んでたゝかひ候處を、三十挺の馬上種が島の鐵炮よこ合にうたせ、三十人の馬

上魚鱗にして鎗先を並べ、どつとかゝり候はゞ勝事うたがひなしと下知しける。

一、大坂勢少しもたまらず敗軍いたし候。その敗軍武者の内よりかちものども、みかたにまねびさまよひ候處を、安房守めし連たる三十人の馬上これを見て、高名可仕とおもひ候ひて走り出候へば、安房守下知しけるは、あのかちもの、首を取候はゞ、くせ事比興ものと下知しける。大事の前の小事、此先よき武者これあるべく候間、武者魚鱗にして惣川柵際へ付候へと申ける。伊賀申候は、城へ乗入候間、いそぎ乗候へと安房守に申候處に、安房守申候は、今少し見合候へと申候へば、伊賀さらば先を見合さいをふり可申間、さい次第に御乗可有と申す。其時安房守三十人の鐵炮を立並べて、人數寄合ものは魚鱗にして城へかゝり候へば、よこ町より馬乘二十騎許馳向ふ。伊賀守馬よりおり立て、鎗おつ取すゝみ出で申候へば、安房守申候は、二間三間へひきよせ、その時種が島の鐵炮三十挺、馬上の手人數三十騎、組の寄合ものいづれも魚鱗にして、一文字にかゝるべきと下知し給ふ。其時はやむかふ武者の内より一人さし出る。安房守、

はや城は落城と相見え申候。それに付て味方かとおもひさきへはたらき申候。其刻城内より馬上二騎申付、兩御所様へ、城は落城仕候間御注進被成候て可然と申候て、筑前様へ申上る。則安房守ものを被遣候。存合候へば、てきかとは今はおぼえ申候。

一、大坂岡山にて七日の御合戰の時、道筋に大坂勢高見に黒山の如く相見え申候。味方の人數も道筋高見に立申候。

雙方下はだら／＼おりにて候。はじめは閑齋・安房守三人の談合にて、大坂勢道筋くろ山のごとくに控申たる所へ、ついてかゝるべしと被申候。其時山城守閑齋、安房守三人と前にあるは、山城守と三人、少し乗出し見申候へば、だら／＼おりの下細路にて候條、此大人數細路にてつかへ可申候間、右の方へまはし候ては如何と、安房守・閑齋へ談合申候へば、兩人も一段尤の由早速うけ申候。然る所に筑前様被成御座候に付て、三人の申ぶん申上候へば、一段尤に候間右へまはし候へと御下知にたまはし申候。

一、大坂七日の御合戰の時、山城守殊の外はやり申に付て、御陣より罷返り相尋候へば、よく見付候。申ごとくはやり申

候。そのはやりたる御見あての事承候。大坂勢道筋に黒山のごとくに備へてこれあるその内より、步武者五七人宛大坂へ引取申候。強くばなにしに引取可申候哉。よわきにしりぞくと、こゝをもつてはやり申と申候。殘所もこれなき御見あてに候と、殊の外ほめ申候。

一、御合戰味方の人數、そなへ／＼を魚鱗にして黒山のごとくにして突かゝり候へば、それをみて大坂勢少しもつかへず其まゝ敗軍。城中へつけ入、先づ一番に山城守火を付させ、其時城内にてのぼりを家のうへへ指あげ候を、筑前様御覽被成候。

一、そのまゝ、筑前様被成御座候處へ、山城守早々こされ候て、城は火をかけ焼くつし落城いたし候條、急ぎ兩御所様へ御注進として、馬上兩人被遣候て可然と筑前様へ被仰上、被遣候。又はし／＼殘る家を、御歩衆被遣御燒可被成候由に、是又山城守申上候。

一、山城守、のぼり指一番に家の上へあがり候ものに銀子三枚、二番にあがり候ものに二枚、三番にあがり候ものに一枚被遣候。殘所無之候。